

平岩弓枝

神かくし

御宿かわせみ



石弓枝

かくし

御宿かわせみ



文藝春秋

神かくし・御宿かわせみ

一九九〇年五月三十日

第一刷

一九九〇年七月十五日

第三刷

(定価はカバーに
表示してあります)

著者 平 岩 弓 枝

発行者 豊 田 健 次

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三―二三
電話代表(〇三)二六五―二二一

印刷所 凸版印刷
製本所 加藤製本

万一、落丁・乱丁の際は
お取替えします

© Yumie Hiraiwa 1990

Printed in Japan
ISBN4-16-311840-3

目次

梅若塚に雨が降る	5
みずすまし	33
天下祭の夜	65
目黒川の蜚	95
六阿弥陀道しるべ	124
時雨降る夜	156
神かくし	188
麻生家の正月	223

装
幀
栗
屋
充

神かくし・御宿かわせみ

梅若塚に雨が降る

一

この年、江戸は大火があいついだ。

正月早々、四谷から市ヶ谷にかけて焼野原になり、続いて芝の金杉橋界限が焼け、三月には湯島から広小路が灰になった。

どうやら暖かくなって人々がほっと息をついた時分に浅草橋一帯が焼け出され、四月になってからは日本橋北小伝馬町から出火して、浜町河岸から堀江町の入り堀までの間、富沢町、長谷川町、高砂町、田所町、新乗物町、堺町、住吉町、新和泉町、元大坂町の大半が灰燼に帰した。

大川端にある小さな旅館「かわせみ」の女主人である、いがお吉を供にして向島へ出かけたのは、田所町に住む知人の家族がその大火で焼け出され、隅田村の隠居所へ避難しているのを見舞うためであった。

火の手が上ったのが寝入りばなということもあって、半鐘の音で目をさました時には家の前が赤くなっていたというくらいで、大方の人々が着のまま命からがら逃げ出したそうだが「それでも、私共はまだよかったほうで、堺町や堀江六軒町のほうでは逃げ遅れて随分と焼け死んだ方がおありだったとか、未だに家族の安否を気づかいながら焼跡通いをしてお出の方もあるそうで……」

田所町で長年、乾物問屋をいとなんでいた大坂屋藤兵衛というのが、るいの見舞先だったが、その女房のおとよというのが、いささかやつれた様子で話をしてくれた。

主人の藤兵衛は奉公人と一緒に焼跡の整理に出かけていて、住居も店も焼け落ちてしまったが、商い倉だけは無事だったようで、来月には仮店を作って商売を続けるという。

住むところも、こうして先代の時に造った隠居所があるので、さし当てるの不自由はないが、向島の寺には、焼け出されて行きどころのない人達が本堂を借りて雑居しているらしい。

「お寺さんのほうでも、まあ檀家の方々の御縁故なので、親切になすっていらっしゃるようですよ……」

そんな世間話を少々聞いて、見舞の品々をおき、やがて、るいは暇を告げた。

「いやですねえ。火事と喧嘩は江戸の華だなんていいますけど、なにが華なものですか。長年、丹精した身代を灰にして、泣いても泣き切れやしませんよ」

帰り道、舟を待たせてある寺島村の舟着き場まで歩きながら、お吉がしきりにぼやいた。

向島の堤の桜はもう散ってしまつて、原には蓮華の花が咲いている。

うらかな日中は火事見舞にはふさわしくなく、遠くの農家には気の早い鯉のぼりが風がないので、しょんぼりと下ってみえる。

木母寺の前まで来て、るいは思いついて梅若塚へ詣でて行くことにした。

むかし吉田少将惟房という人の子で梅若丸というのが、信夫藤太に欺かれて東国へ連れ出され、隅田川のほとりまで来た時に病気が重くなり、一足も歩けなくなつたので藤太は梅若丸を、この土地に捨てて去つた。里人が介抱したが、その甲斐もなく、梅若丸は「尋ねきて問わば答えよ都鳥、隅田川原の露ときえぬと」の一首を残して世を去つたという。里人があわれんで、塚を作り墓にしたのが梅若塚で傍には一本の柳の木が植えてある。

後に謡曲の「隅田川」などによつて梅若丸の母が狂女となつて我が子を追い、ここへ来て我が子の墓と対面するという悲しい物語は人口に膾炙かいしやしている。

るいにしても、その物語に心を打たれるものがあつて、この近くまで来ると、余程、急ぎの用でもない限り、木母寺に立ち寄つて梅若塚に香華をたむけていた。

で、今日も塚に合掌していると、どこからか赤ん坊の泣き声が聞えて来る。

子守つ子が泣く子をあやしてでもいるのかとあたりを見廻してみたが、それらしい姿もなかった。

木母寺の境内を抜けて、水神の森のほうへ出る。

「お嬢さん、あそこ……」

お吉が指したのは杉木立のところで、一本の木に紐が結んであり、その先にやっと歩けるかど

うかといった年齢の赤ん坊が結びつけられている。

木の下は雑草が茂っていて、赤ん坊が這い廻っても泥だらけになるというものではないが、紐の長さは五尺足らず、なにかのはずみでひっくり返ったのだろう、赤ん坊は仰むけになったまま、声を限りに泣いている。

「まあ、いったい、なんてことを……」

お吉が走り寄って紐を解き、るいが赤ん坊を抱いた。ずっしりと重く、柔かな体るいがもて余しながらゆすぶったが、一向に泣きやむ様子もない。

「お腹がすいてるんじゃないかね」

お吉がのぞき込み、それから赤ん坊の着物をめくって

「お襦袢むつもぐしょぬれですよ」

と眉をしかめた。

「捨て子ですよ。かわいそうに……」

お吉が木母寺の境内をふりむいた。

そっちには掛け茶屋が三軒あって、その中の武蔵屋は少々、昵懇でもある。

「あちらへ行つて、とにかく、なにか食べさせてみたらどうですかね」

泣く子をもて余していたるいも、その気になって武蔵屋のほうへ歩き出すと、水神の奥の木立から若い男女がふざけ合ひながら出て来た。

こつちをみて女がなにか叫び、男が走って来た。

「あんた方、その子をどうする気だ」

「どうするって……」

向い合ったのはお吉で

「捨て子をつけたから、届けに行くんですよ」

「よけいなことをするな。そいつは俺達の子だ」

「あんた方の……」

若い女がとんで来て、るいの手から赤ん坊を抱きとった。

「よしよし、清吉、泣かないのよ」

「冗談じゃありませんよ」

つい、るいもきびしい声になった。

「犬じゃあるまいし、こんな所に赤ん坊をつないでおいて……あたしたちが来た時、この子がどんな恰好をして泣いていたと思いますか。あんた方はいったい、どこへ行っていたんです」

改めて相手を見て、るいはどきりとした。

女の髪には落葉がついていた。肩にも着物の後のほうにも枯れ芝や草が付着している。

衿から胸のあたりがだらしなく着くずれして、下半身に力がなくなっている。男は上気した顔で、こちらもどこかしどけない。

水神の森のしげみの中で、二人がなにをして来たかは、一目瞭然であった。

るいが黙って歩き出し、お吉が

「全く、赤ん坊ほったらかしにして……みっともない」

捨てぜりふを残してるいの後を追って来た。

寺島村の渡し場へ来ると、待たせてあった小舟のところに長助が立っていた。

「実は、あつしもこの近くの寺に焼け出されの知り合いがいるんで、ちょいと見舞に行ったところなんで……」

通りすがりに船頭をみて、顔見知りなので声をかけると、るいとお吉の名前が出たので、それではと待っていたといった。

「なにかあったんですか」

るいとお吉の顔色をみて、すぐに訊いた。

「馬鹿馬鹿しいったらありゃしないですよ。捨て子かと思ったら、お父つぁんとおっ母さんが出て来てね」

舟に乗り込みながら、お吉が長助にいいつけた。

「近頃の若い親と来たひには、なにをしてくすかわかりやしませんよ」

ついでだからと、永代橋の近くまで便乗させてもらった長助に、お吉は忿懣やる方ないといった口調で話すと、苦笑しながら聞いていた長助が分別くさく答えた。

「そいつはどうも、あんまりいい気持のものじゃござんせんが、ひょっとすると、やっぱり焼け出されの夫婦者かも知れせんよ」

長助が訪ねて行った西光寺という寺にも、この前の火事に遭った人々が何家族も厄介になって

いたが

「なにせ、だだっ広い本堂から内陣までに四軒か五軒の焼け出されが一緒に雑魚寝をする毎日で、若い夫婦はどうにも困っている按配でした。早いところ、仮小屋でもなんでも、家族だけの暮しをしたいと、まあ人情でござんすからねえ」

そういわれて、るいも考えを改めた。

夫婦が他人の中で何日も暮していれば、時には二人だけの束の間を求めたくなるのが当然かも知れないと思う。

「それにしても赤ん坊は災難でござんすね。木につながれたんじやたまりますまい」

若い連中は無茶をするものだ、長助も慨歎している。

大川端の「かわせみ」へ戻って来ると、畝源三郎うねげんざぶろうの妻のお千絵が息子の源太郎を伴って遊びに来ていた。

八丁堀の屋敷にいては、どうも人見知りをするようになるからと、このところ、よく「かわせみ」へやって来る。るいとは幼なじみで、その点、気がねがなかった。

「どうぞ、ごゆっくりなさいまし。源太郎坊っちゃん手前が留守をしていますから」

大きな膝に源太郎を抱いた嘉助かすけが嬉しうにいい、お千絵はるいの部屋へ通って、女ばかりのお茶になった。

「畝様は相変らず、おいそがしいのでしょう」

向島で買って来た団子を勧めながら、るいがいい、お千絵が青い眉をひそめるようにして笑っ

た。

「火事場泥棒が多いのですって……」

火事さわざで人が避難してしまった家へ入って盗みを働く者から、焼跡へいち早く戻って来て、焼け残った土蔵の扉をこわして中の品物を盗んで行く。

「普段と違って、御近所の人々も焼跡の片付に親類の人が来ているのかと、つい、うっかりしていると、あとになって、あれは盗っ人だったとわかるのですって……」

「畝様も御苦勞なことですのね」

「東吾様は狸穴まみでしよう」

「ええ、もう四、五日でお帰りになりますけれど……」

「お待ちかねね、おるい様」

他愛もない話をしているところへ、嘉助が来客だととり次いで来た。

「富沢町の近江屋の大番頭さんで……畝の旦那のお口ききで来られたといいますが」
るいが帳場の小座敷へ行ってみると、小肥りの五十がらみの男が待っていた。

呉服問屋の番頭というだけあって、腰が低く、口のきき方も優しい。

「不躰に参上いたしましたして申しわけございません。手前は近江屋の番頭で芳兵衛と申します」

近江屋というのは日本橋の白木屋とも取引のある大店だが、富沢町という場所柄、古着も扱っているといった。

昔から富沢の市というのは古着市で日本全国からの古着が集められるので有名だったから、古

着専門の呉服屋の数が多い。

が、近江屋は本来、新品の呉服物を扱っている店で奉公人の数も三十人以上という老舗であった。
「富沢町でしたら、先だつての火事で……」

るいが訊き、芳兵衛が頭を下げた。

「すっかり焼け出されましたが、商売蔵は三つとも無事でございました」

火事の多い江戸のことなので、こうした大きな店では防火の手筈もととのつていて、普段から奉公人に訓練のようなこともしている。

「まあ不幸中の幸いと申しますか、只今、飯店を普請して居ります」

ところで今日「かわせみ」へ来たのは

「手前共の奉公人の夫婦者を一組、暫くの間、お宿を願えませんかと存じまして……」

奉公人といっても、ただの使用人ではなく

「手前共では、元来、近江屋源七と申しますのが主人でございましたが、先代源七が病弱なこともございまして、どうも商売がおぼつかなく、それで取引のあった白木屋さんをお願い申して、商売の肩代りをして頂くことになりました」

店の経営を白木屋本店にまかせ、白木屋のほうから然るべき番頭や手代が乗り込んで来て、それまでの近江屋の奉公人も一緒にあって、店をやって行く恰好になった。

「今のところ、万事、好調にやって居りますし、今度の災難も白木屋さんの援助がありますので、無事に切り抜けることが出来ようかと存じます」

大店の奉公人はどこもそうのように、殆んどが住み込みで独り者が多い。所帯を持つのは、長年勤め上げて暖簾わけをしてもらえるようになってからというのが普通であった。

「ですが、手前共の手代をして居ります清二郎と申しますのは、先代近江屋源七の倅せがれに当りまして……」

近江屋の商売が白木屋の手に移ってからは手代として働いているが、すでに女房持ちで子供もある。先代の倅ということもあって、特に自分の家から通いで奉公することが認められていたのだと、芳兵衛は説明した。

「長谷川町に家がありました、そっちも焼け出されて、今は先代ゆかりの寺に御厄介になつて居りますが、まだ幼いお子もおありで、なにかにつけて不自由でございます。間もなく、然るべき住居を決めることになりましょうが、とりあえず、それまで、こちらにお宿を願えないものかと……」

丁寧な挨拶に、るいはすぐ承知した。

「よろしゅうございます。手前共でよろしければ、どうぞお出で下さいますように……」

子供連れということであれば、新築の部屋がよからうといった。

「他のお部屋とは離れて居りますし……」

庭に建て増しをする時、枝ぶりの良い梅の木と銀杏の木を伐りたくなかったので、母屋とは廊下伝いの別棟になっている。かわせみでは上等の部屋であった。

「早速、御引受け下さいましてありがとうございます。それでは一兩日中に手前が案内して参りま